

聖書 ヨシユア記2章1〜14節、ルカ福音書8章1〜3節

イエスの弟子というと、私たちは12弟子をすぐに思い浮かべてしまっていますが、本日の8章1〜3節を読むと、イエスの弟子には12弟子の他にも女性たちがいたことがわかります。七つの悪霊を追い出して病気を癒してもらったマグダラのマリア、ヘロデの部下であるクザの妻ヨハネ、スサンナなど多くの婦人たちが自分の持ち物を出し合ってイエス一行の宣教活動に同行して、その働きを日常的に支えてたのです。

おそらく12弟子は宣教活動に忙しくて、イエス一行の食事や宿泊場所などの手配ができなかったのでしょう。日常生活を支えることは、宣教活動よりも優先度が低いと12弟子たちからは考えられていたと思われるかもしれません。これに類する考え方は現代でもあります。日常生活よりも、高貴な思考活動や対外的な行動の方が大切だという考え方です。けれども、日常生活を維持する家族がいなければ、一級の思想家も経済的な指導者も、自分のやりたい課題を成し遂げることはできないでしょう。

戦後日本における典型的な家庭像は、妻が家庭を守り、夫が企業戦士として外で働くというものでした。これを夫の側の都合で見るとはなく、妻の立場から見るとは、自分を犠牲にして夫や家族のために奉仕をするという視点ではなく、誰かの役に立ちたい、他人を大切にするという気持ちだけに焦点を当てたならば、尊いモチベーションということもできるでしょう。このモチベーションが他者を生かし、自分も生かすように働いているならば、召命と言う者になります。

1

キリスト教で召命というのは「神が召して命じたこと」のことです。イエス一行の宣教活動に同行して、その働きの日常生活を支えていたものも、召命ということができるでしょう。女性たちの働きも宣教活動と同等の価値を持っていたと言えるでしょう。神が与えた仕事と言う意味で召命は「職業」を意味することもあれば、「天職」という意味でも用いられます。

いずれにしても、自分の働きが本当の意味で召命と呼ばれる中身を持つためには、神の召しであることに気づかなくてはなりません。2006年に岩波書店から出版された「釜ヶ崎と福音」神は貧しく小さくされた者と共に」という本を書いたカトリックの本田哲郎神父が興味深いことを書いています。

釜ヶ崎でホームレスに対する活動をしている本田神父は床屋をしながら活動しているのですが、ある時、ホームレスの独りが「本田神父さん、あんたは信用できるから、あんたのいう洗礼ちゆうものをわたしにもしてくれんかい」と言われたそうです。その時、本田神父は「洗礼なんて、受けない方がいいよ」と言ったのです。

通常であれば、カトリックの場合、本人が洗礼を受けたいと言えば、比較的すぐに洗礼を授けます。でも、本田神父は洗礼を受けない方がいいよ、と言ったのです。ホームレスの人々

は、ホームレスであるがゆえに、心の奥底で屈辱を噛みしめながら、炊き出しの列に並んで配給を受けると「ありがとござんす」と言いながらおにぎりをもらっています。

ところが、あるホームレスが洗礼を受けて、配る側の人になったのです。そうしたら、途端に「てめえら、ちゃんと一列に並べ」と命令するようになったというのです。それを見て本田神父は「ああ、洗礼なんて授けるんじゃないかった」と思ったそうです。

この洗礼を申し出た人が同じように、屈辱の裏返しの感情から同じホームレスの人に対して高圧的な態度をとるようになるとは思いませんし、そういう同じ轍を踏まないように、論じて洗礼を授ければよいのと思います。召命という視点で見ると、炊き出しをする意味を丁寧に説明すればよいのに、と思います。人を大切に神の愛の具体的な働きを信仰者が神の代理で行っていることが了解されていけば、いいのです。

イエス一行が神の支配が既に実現していることを宣べ伝えていく中で、その宣教活動の日常を支えた婦人たちのモチベーションは、イエスの立ち居振る舞いが神の愛そのものを映し出していたからです。その意味で彼女たちの働きは神が召して命じた召命であるということが出来ます。男性弟子たちの宣教活動を女性だからといって支える側になって当然だという役割分担で、彼女たちの奉仕が成り立っていたわけではないと思います。

福音書を読む限り、イエスは自分の信仰や生き方を押し付けるようなことはしていません。イエス自身は、弱者とか、疎外されていた人とか、社会の下層にいる人を大切にしました。ユダヤ人であるイエスは、当時のユダヤ人の常識とは違って、ユダヤ人だけと付き合っていないのです。ローマの百人隊長とか、カナンの女性（Ⅱパレスチナ人の女性）とか、サマリヤ人とかに対して、好意を贈っています。ただ、区別なく神の愛の対象であることを告げているだけです。

人間として、底知れぬ同情と好意を贈っている。それが神の本質だからです。

神の愛は、人間をして生かそうとする篤い思いです。そういう他者を生かそうとする働きをすることが、いま、自分の与えられた現場の仕事は、すべからず召命によるものだと言えるでしょう。通常、キリスト教では召命と言うと牧師に召されることを言いますが、それだけではなく、召命はドイツ語では Beruf と言って、職業のことでもあります。それは、今与えられている自分の仕事や立場を召命だと受け止めて働くということの意味することからは派生したことを表しています。

今の自分の仕事、立場に神はどのようなことを求めておられるかを考えることが召命へと招くのです。他者に対して善意を向けているとき、私たちの内に神の愛が働いてくださるのです。その神の愛が、私たちの個人個人からあふれ出ていくように、神に生かされてある者として生きて生きていきたいと願う者でありたいものです。そういう意味で、今与えられている立場が「召命」だと受け止められるものを見出したいものです。

